

(様式3)

農業研究成果情報

No.461

(平成22年5月)分類コード02-04

熊本県農林水産部

ニガウリ「熊研BP1号」における大果生産のための摘花の目安

交配時の雌花の子房長と収穫期の果長の間には有意な正の相関が認められ、交配時の子房長が長いほど収穫期の果長も長い。果長23 cm以上の果実生産を目標とする場合には、開花時の子房長が25 mm未満を目安に摘花する必要がある。

農業研究センターい業研究所作付体系研究室(担当者:岩本英伸)

研究のねらい

ニガウリは大きくボリューム感のある果実が市場での評価が高い。しかし、着果負担により草勢が低下した場合などには小さい果実が増加する。そこで、「熊研BP1号」における果実の発育特性について調査し、大果生産のための摘花の目安を明らかにする。

研究の成果

1. 「熊研BP1号」の果実は果長、果径ともS字状の生長曲線を示す(図1)。
2. 交配時の雌花の子房長と収穫期の果長の間には有意な正の相関が認められ、交配時の子房長が長いほど収穫期の果長も長い(図2)。このため、商品価値の高い大果を中心に生産するには、雌花が小型化しやすい生育中期以降、子房が短い雌花は交配せず摘花する必要がある。
3. 収穫果実の果長の目標を23 cm以上とする場合における摘花する雌花の子房長の目安は、得られた回帰式 $y=6.084x+78.44$ から25 mm未満となる。

普及上の留意点

1. 本試験は無加温半促成栽培で、草勢が低下し雌花が小型化した5月25日に開花した雌花を供試して行ったものである。
2. 摘花の目安は交配時期や草勢の強弱、天候等により変化する可能性がある。
3. 交配初期は雌花の開花が多く着果過多による草勢低下を招きやすいので、平成19年度農業の新しい技術「県育成ニガウリF₁品種「熊研BP1号」の半促成作型における安定多収のための着果技術」を参考に着果制限を行う。

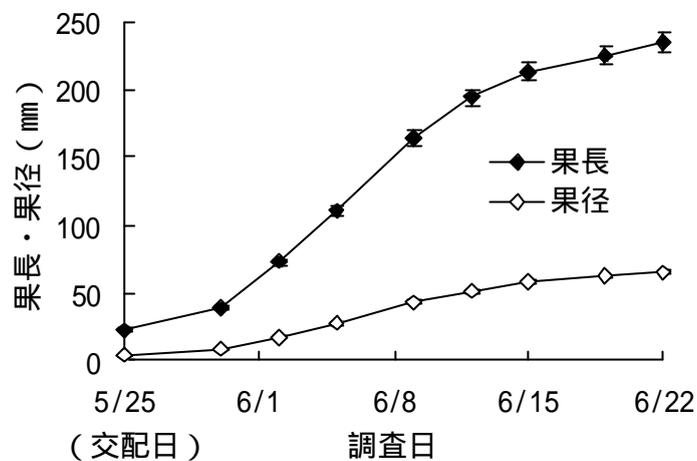


図1 果長および果径の推移
 図中の縦線は標準誤差 (n=22) を示す

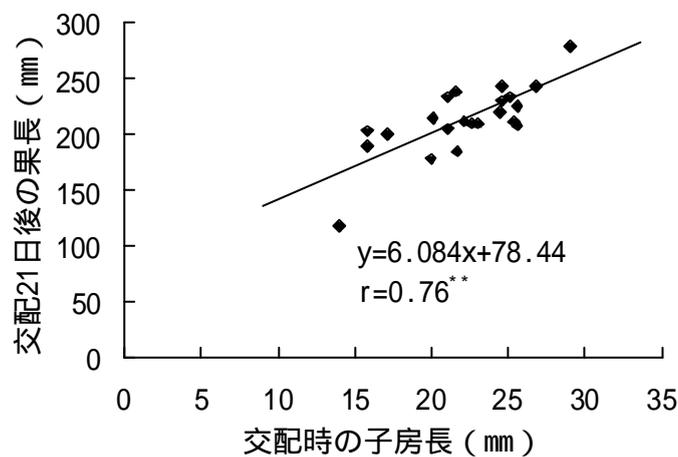


図2 交配時の子房長と交配21日後の果長の関係
 無加温半促成栽培の5月25日に開花した雌花を供試した
 **は1%水準で有意であることを示す